

## 一首の重さ 駒田晶子

角川「短歌」一月号に、短歌における「人間」とは何か、という新春座談会が設けられていた。メンバーは馬場あき子・永田和弘・小池光・穂村弘・永井祐。各氏が「人間」を感じる三首を用意し、論じている。一首から作者の実人生まで読みとるべきなのかどうか。それが短歌の読みなのか。

大野道夫『秋意』（本阿弥書房）、千種創一『砂丘律』（青磁社）を読んだ。どちらも、作り手の意志がくつきりとしている。

- ・「水下サイ熱方出マシタ」米軍へ甘える自衛隊にボクラ守られ
- ・敗戦後知識人の反戦の「反」押すように 反ゲンパツよ
- ・マフラーへ鼻を埋めて黙禱すブエノスアイレス八月六日

『秋意』には、歌合の題のために作った一首を推敲し作り直してゆく過程を〈試作歌〉へ提出歌へ〈歌合後作〉と並べたページもあり、興味深かった。通常は、歌集に最後の形の一首のみを載せるだろう。東日本大震災の後の日本の姿を詠んだ作品は、批評のことばを拒む。あんまりな現実を、ありのままに差し出している

からだ。短歌的な嘆きや抒情は滲まない（ように作られている）。「短歌」という、不可思議に重量のある形式を揺さぶりたい意図を感じる。

・窓のすきまから春風が、灯油くさい美術室舞う、羽根つつすかれ  
 ・煙草いりますか、先輩、まだカロリーメイト食って生きてるんすか

・通訳は向こうの岸を見せること木舟のように言葉を選び  
 ・オリヅの葉裏は鈍い剣のいろ 反権力を言へば文化人かよ  
 ・君はパンケーキ頬張る。続きますように。本音の言える時代が  
 『砂丘律』より。凝った装丁の一冊だ。口に出した途端に消えてゆくような会話体から成る一首があり、作者の暮らす中東の光景が浮かぶような一首は、比喩を用いて深度を出し、ほぼ定型なのが興味深かった。

瞬間を切りとること。長い時間を滲ませること。どちらも短歌の得意分野だ。「人間」が見えるかどうかは、読者が決めるだろう。